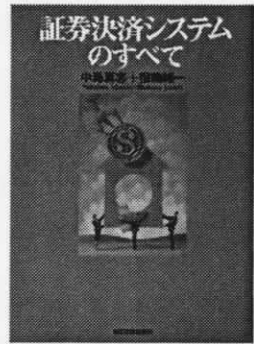


本書は、証券決済システムに関する待望の書である。この分野は複雑で動きも激しく、一部の関係者を除くと、なかなかわかりにくい分野である。T+1、DVP、STP、RTGSなどといった用語が続出し、初めてこの分野を知ろうとすると閉口する。しかし、激変する今日の金融・資本市場において、この分野の重要性は増大の一途をたどっている。

中央集約的な証券決済システムの登場・存在・発展が、いまや世界的にも確立し、そこでは資金決済の場合と同様の決済リスクが存在する。そのため、システムの効率性



『証券決済システムのすべて』

中島真志・宿輪純一 著

証券決済の歴史・現状・改革動向を理解する基本書

【評者】 東京大学教授 神田秀樹

を高めるとともに、決済リスクを削減することが、その国の証券市場の国際競争力の向上にとってきわめて重要な課題となっている。また、世界的にも決済システムは国境を越えて連携しているのが実情であり、それに応じて世界的な規模での決済リスクの削減が求められている。

ところが、日本の証券決済システムは、さまざまな過去の経緯から、法律制度を含めて世界のレベルから大きく遅れており、その改革作業は金融ビッグバンからも取り残され、進展しなかった。

しかし、ようやく数年前から、法律制度の改革を含めた本格的な改革が急ピッチで進められ、現在開会中の通常国会にも重要な法改正案が提出されているというのが現状である。

証券決済システムは、このように重要分野であるにもかかわらず、これまで、この分野を包括的

に取り扱った書物は日本にはほとんど存在しなかった。ようやく日本でも証券決済改革が強力に押し進められる状況に至っている現在、本書は、まさに最適のタイミングで刊行されたといえる。

本書は、このような世界レベルでの競争にさらされ複雑な変貌を遂げつつある証券決済システムについて、幅広く高度な内容をわかりやすく一冊にまとめることに成功している。

具体的には、第一章と第二章で証券決済に関する基礎知識と証券決済のリスクについての説明がなされ、第三章で証券決済のトレンド、第四章で証券決済の改革に向けた各種の勧告が紹介されている。第五章と第六章ではアメリカとヨーロッパの証券決済システム改革の経緯・現状・課題が描かれ、第七章では国際的な照合システムであるGSTPAの説明がなされている。以上を受けて第

八章では日本の証券決済システム改革について論じられている。

内容は激変する世界レベルでの改革動向に関する着実な現地調査の成果等をふまえたものとなっており、きわめて信頼のおけるものとなっている。また、巻末には関係用語の略語リストや関係ウェブサイトのアドレスなども用意され、読者に対する配慮が行き届いている。

著者はいずれも、すでに別著『決済システムのすべて』（東洋経済新報社）で知られている「決済分野」の第一人者であり、本書は、証券決済に関する基本書の定番としての地位を確立することは間違いない。

本書は、初心者にとっても専門家にとっても、証券決済システムの歴史・現状・改革の動向を知るための最適の書物であり、その刊行を喜ぶとともに、ここに広く推薦したい。